

3. 世界大恐慌～日中戦争開始まで (1929 年～1937 年)

(2) ナチスの“兄弟”「ニューディール」とアメリカ労働者の闘い の最後

/1930 年代アメリカ労働者・民衆の大闘争の意義/

第二次大戦後、日本が「こぼんざめ」としてすぎるアメリカにとって、1930 年代の大闘争の意義は何だろうか？

今も「アメリカに社会主義はない」と言われるが、1930 年代大闘争が「社会主義革命」に至らなかった根底には「人種資本主義」の壁があった。

しかし、この闘争は、「人種資本主義」の変質を迫る「新たな黒人」を生み出した。

そして、2016 年、トランプの登場は、黒人の闘いが生み出した「白人の憂鬱」という「人種資本主義」の変質、そして、民衆が根本的変革を迫る新たな「革命」の可能性を示しているのではないか。

1930 年代大闘争はその原点ともいえる。

「人種資本主義」と「社会主義革命」

アメリカ労働者・民衆の激しい闘いは、体制を追い詰め、「ニューディール」を勝ち取った。しかし、ロシアのように、ドイツのように「社会主義革命」には至らなかった。

もちろん、ルーズベルトは社会主義者でも共産主義者でもなかった。

1935 年、ルーズベルトが歳入法を制定し、500 万ドル以上の所得には 79% の高率所得税を課すとした時、新聞王ハーストは「共産主義だ。こんな法律を作った大統領はスターリン・ルーズベルトだ」と非難した。ルーズベルトは「私は共産主義と戦っている。私は資本主義を救いたいだけだ。」と反論した。

「社会主義的」に見える「ニューディール」は、「当時、全面的な革命を阻止する唯一の方法に思われたのだ。」

一方、アメリカ共産党は労働運動で相当の存在感があった。

最も長い「Sit-Down」ストだった 1936 年からの GM フィッシャー工場大闘争のスト委員のほとんどはアメリカ共産党員だった。「ランク & ファイル」が生み出した CIO が正規の組織となった 1938 年には、加盟組合の 4 割で共産主義者が完全または部分的に指導的地位を占めた。CIO 組合員数全体でも

1/3 は共産主義者の影響力のもとにあった。CIO 本部の執行委員会では、ILWU のジェフ・ブリッジスをはじめ共産系の組合代表が参加していたほか、会長ルイスの法律顧問プレスマンと機関紙編集長ドウコックスが共産黨員だったといわれる。

しかし、見たように、アメリカ共産党は、1935 年以降、「ソビエト・アメリカ」「労農政府樹立」を掲げながらも「コミンテルンあるいはスターリンの人民戦線戦術に引きずり回され、ほとんど無批判にニューディールとルーズベルトを支持した。」

「赤い 10 年」と言われた 1930 年代、特に CIO に見られた革命性は開花しなかった。その後、アメリカ共産党と同党系の組合や支持者は、ルーズベルトの戦争を支持し、第二次大戦後、CIO から排除され、「赤狩り」で壊滅状態になる。

これを「コミンテルンへの盲従」あるいは「日和見主義」と片付けるのは簡単だが、この根底に何があったのか。

欧米の研究者による「社会主義が失敗したアメリカの特質」といった静態的な分析が諸説ある。

それは、まず、「自由と民主主義が根付き、社会主義への志向がなかった」と言う。

“古い封建的なヨーロッパ”からの独立宣言「すべての人は平等。生命、自由、幸福追求の権利がある。これらの目的を破壊する政府を廃止する権利がある。」に始まり、当初から白人男子に与えられた選挙権に基づく大統領制、2 大政党による議会などが「発展」した。

しかし、「建国の父」、そして独立宣言署名者の大半は、地主であり奴隷所有者だった。独立宣言の「すべての人 (man)」は、白人男子のことであり、黒人はもちろん女性も含まれなかった。

当初、「党派争い」を嫌い憲法上想定されなかった政党が、大統領と議会の対立を調整するために設立された経緯は、日本で、明治憲法のもとで元老では調整しきれなくなって 2 大政党を設立した経緯と同じである。

奴隷解放宣言の経緯でも見た通り、2 大政党の違いは、北部と南部の資本の利害の違いでしかなかった。

ふたつ目には、当時、アメリカ資本主義が、「フロンティア」つまり市場の対外的拡大で、世界最大の成長を続けたことで、「民衆へのおこぼれ (トリクルダウン)」の余地があったこと、それが、労働者の「“ローストビーフとアップルパイが食べられる”体制を支持する中流意識」を育てたとされる。

「国内の不满を海外侵略でそらす」のは日本も同じであるが、その「フロン

ティア」拡大は、もっぱら南米をはじめ「有色人種の土地」の侵略によるものだった。

みつつ目に、アメリカは、1910年代までに、急速な資本主義の成長に伴う労働力不足を補うために、世界最大の「移民国家」になったこと。

流入した大量の移民のうち、イギリス系は2割程度だった。1910年代前半で、アメリカの賃労働者の6割が移民ないしその子孫で、アメリカ生まれの白人の親を持つ者は2割にすぎなかった。1930年の国勢調査では、全人口の1/3が外国生まれないし二世だった。

彼らは、自らの民族を優先し団結しにくかった、と言われる。

しかし、1930年代、ペンシルベニアの鉱山労働者をはじめ、貧しい白人労働者と黒人労働者、移民労働者は、団結して闘ったのが史実である。

そして、CIOは、黒人の加入を認めた。共産党は、「人種的平等に特別の注意を払い、1931年、アラバマのスコッツボロ事件で白人女性のレイプをでっちあげられた黒人少年たちを擁護する運動に加わった。」

だから労働組合、失業者評議会の現場に多くの黒人が加わった。

しかし、勝ち取った「ニューディール」で、大半の黒人が埒外だった。

一方、例えば、「定められた最低賃金が極めて低賃金」だったにも関わらず、大半の白人労働者はルーズベルトを支持した。「北部でも南部でも、1930年代のアメリカの白人にとって黒人は眼中になかった。」

過半を占める白人労働者が一定達成感を得るなかで、共産党は、残された黒人とともに戦い続けることはなかった。

結局、諸説の言うことは、「白人のための自由と民主主義」と「有色人種の土地へのたえざる侵略」であり、言い換えれば「人種資本主義」となる。

ルーズベルトが、民衆の分断を図るために意図的に操作したその壁をアメリカ共産党は越えられなかった、あるいは超えようとしなかった。

民衆に浸透する「自由と民主主義」と「人種資本主義」のセットをどうしていいかわからないという意味では、戦前、民衆の搾取・差別の元凶でありながら、民衆に浸透する天皇制をどうしていいわからなかった日本共産党とも似ている。

しかし、アメリカの黒人は、1930年代の大闘争で学び、自ら立ち上がり、第二次大戦後、世界の黒人反乱の潮流のなかで、1960年代に至り、300年の時を経て、ようやく「法的」に人種差別法制を撤廃する。

一方、それと前後して、1970代以降、白人労働者の「憂鬱」が始まり、彼

らの「不満」と「不安」の上にトランプが登場する。

黒人民衆の闘いが、「人種資本主義」を変質させてきている。

1930年代の大闘争は、その重要な画期となった。

黒人作家たちが見た革命と紡ぎだした「新たな黒人」

1930年代当時、黒人は革命や共産党をどう見ていたのか。

W・E・デュボイスなど多くの著名な黒人闘士たちは、共産党への支持や共感を隠しはしなかった。

前に見た「Let America be America again」という詩を書いたラングストン・ヒューズもそうだった。

1902年に北部ミズーリ州でインディアンとの混血として生まれた彼は、1930年代、詩の朗読の巡回で南部を訪れ、2018年公開の映画「グリーンブック」でも描かれたような激しい「ジム・クロウ（人種差別）」の状況に驚いた後、「黒と白」の歴史の映画を製作するというソ連に脚本家として招かれて訪問する。

結局、ソ連当局は、アメリカ政府の圧力により、映画製作を中止するが、その間、彼は希望して、ひとりで、中央アジアの今のウズベキスタンを訪れる。

「ソ連の実験」にたいして好意的同情的な自由主義者たちは、ソ連を訪れ帰国する時には、その多くが好意的ではなくなっていた。しかし、私の考えでは、やっと15歳になったばかりのソビエト連邦に、あまりに多くを短期間に期待しすぎたのだと思う。わたしは、誰かが解放された黒人について語った言葉を念頭においていた。「黒人の進歩を測るなら、彼らがどこまでやりとげたかではなく、そこに至るまでどれだけの距離をやって来なければならなかったかを尺度とせよ」

「たぶん、中央アジアまで出かけた経験が、わたしに、ソビエトの実績の評価に関してより広い見解を与えてくれたのだろう。ウズベキスタンでは、1924年に生まれた新機構（ウズベク・ソビエト社会主義共和国）がまだ8歳になったばかりだった。それでもここでは、ほぼ完全に文盲状態だったのが全児童に対する教育制度に、古い封建的農奴制度はすべてのひとに賃金と仕事を与える制度に、ヴェールとハーレムと売買結婚から家畜同様ではなく人間らしく扱われる女性に、そして、人種差別車（ジム・クロウ・カー）は人種差別の全面的廃止にと、こぎつけていた。」と彼の自伝に書いている。

それが、モスクワで「歯の治療が無料なんだ！」と感動したことを含めて、彼の見た革命だった。レーニン、トロツキーの起こしたプロジェクトだった。

一方、1930年代から40年代に「最も偉大な黒人作家」と呼ばれたリチャード・ライトは、1908年、南部ミシシッピ州の農場に生まれ、まさに「ジム・クロウ」状況のなかで、「白人の歓心を買うために他の黒人少年と争うことに深く悩みながら」苦闘の少年時代をすごし、1927年、19歳の時に南部から北部の大都市シカゴに脱出する。

シカゴでも、心を閉ざして、あまり語らず、本を読み、いろいろな理不尽なことに冷笑するだけの生活を続けていた彼だったが、1929年の世界恐慌で食いつ持の仕事も失い、政府が設置した救済事務所にパンを求めて訪れた時に見た光景が、革命とは何かを感じ、共産党に入党する出発点となったことを自伝に書いている。

「何時間も待たされている間に、この部屋のなかでなにかが起り出しているのに気づきだした。黒人の男女がひそひそ声で話し合っていた。見ず知らず同士が互いの経験を話し合っていたのだ。だれもが自分に許された限度内でアメリカ的生き方を忠実に守ってきた。しかし、生活苦のために一緒に投げ出されてみると、彼らには初めて自分の隣人の感情がわかりだし、自分たちの生活の集団性を感じ取って、彼らの恐怖は消えかけていた。」

「自分の住んでいる社会から拒否されている人々の心の中に、人生についての新しい理解を生み出す可能性のあるのを感じた。孤独なのは自分ひとりではないことを、社会がわたしと一緒にほかの数百万の人々を投げ出したことを、わたしに教えてくれた日だった。わたしの言葉と態度は変わった。私の冷笑は消えた。」

「その何百万という人々は、この国が差し出す褒美をけっしてほしがらないという人々だろう。なぜなら、革命がすでに起り、新しい生き方としてその姿を現す時期を待っているのは、こうした人々の心の中なのだから。」

彼は、小説家として、こうした人々の姿を、そして、彼らが一つに結合していく可能性を描きたいと思い、革命的芸術家団体である「ジョン・リード・クラブ」に入り幹部として活動し、それを発展させたいと共産党に入党した。

しかし、しばらくすると、黒人だけの共産党細胞の仲間から「君は本みたいな話し方をする」「インテリは党になじまない」と言われる。

彼は、自分は初等学校しか出ていないこと、小説を書くことを通して革命について広めたいのだと反論しても理解されない。

「もの書きでなく、行動だ」さらに党幹部は「君には、小説をやめて、組織活動をやるべきだ。物価対策の行動委員会をやってほしい」と言う。

黒人の共産主義者から言われることを白人の共産主義者にも相談したが、わからせることができなかった。「白人の共産主義者はすべての黒人を非常に理

想化していた。」

アメリカ共産党の「人種平等」は頭でっかちだった。

「彼らが恐れたのはわたしの考え方であり、感じ方だった。著作は孤独のなかでなされる必要があったのに、共産主義は人間の孤独との戦いを宣言したので、一人だけでいる人間を恐れた。」

彼は離党した。その直後、1936年のメーデーで一緒に行進しようとした彼を元の仲間らは行進の列から「裏切り者」とののしり、放り出した。

その後、ライトは、1938年に「アンクル・トムの子供たち」、1940年に「アメリカの息子」という小説を発表し、「南部社会の不当に対して、声なき声でなく、はげしく抗議の声を発する黒人像」すなわち「新しい黒人 (New Negro)」像を創造したとして評価を確立させた。

1924年に北部ニューヨーク市のハーレムで生まれた黒人作家ジェームス・ボールドウインは、このライトの「一番弟子」となったが、1950年代に入り、敢えて、師匠の「アメリカの息子」について、その意義と限界、深いところでの批判を展開した。

それは、その後の公民権運動でも中心になった彼が示す「自分でもっと考えた黒人」像であるとともに、「人種資本主義」の折り合いのなかで生きてきた白人の「不安」をつくものでもあった。

彼は、たしかに黒人は「アメリカの息子」であるが、一種“外”から抗議するだけの存在ではなく、白人の善意に期待するのではなく、「ニグロはアメリカ人であり、アメリカと運命をともにする」という認識が大事だと言う。

彼は、さらにヨーロッパに暮らしながら、アメリカの外から「ニグロであることの意味」を検証した。

滞在したスイスの寒村では、住民が老人から子供まで親切で差別もなかった。しかし、まったく区別された「よそ者」だった。

そのなかで、彼は、「スイスの寒村にて (原題：村に来た異邦人)」という評論に書いた。

「アメリカのニグロは、文字通り一撃のもとに過去をもぎとられ、世界の黒人のなかでは異例である。ヨーロッパの黒人所有はその植民地の域内にとどまった。現実の人間としての黒人は、ヨーロッパにとって存在しなかった。しかし、アメリカでは、いかなるアメリカ人もニグロに対してなんらかの態度をとらないわけにはいかなかった。」

アメリカの白人にある葛藤は、「ヨーロッパ伝来のデモクラシー」と「ヨーロッパの遺産の縦糸となり横糸となっている白人優越の思想」だと言う。

だから「白人優越の思想に基づく数々の過激な行為には、この思想の生命力と威力に対する不安が含まれているのだ」。「黒人を自分たちの仲間として、受容すれば、白人の地位を危うくし、受容しないことは、白人の人間性の現実、重み、複雑さを容認することになる。否認すべからざるものを強いて否認することからくる緊張が、彼らを病理的、狂気にする」

「アメリカの白人と黒人の長い闘いは、白人にとってはアイデンティティを守ることであり、黒人にとってはアイデンティティを確立することであったが、ニグロはすでに久しい以前に勝利をおさめている。彼はすでにその市民であり、アメリカ人なのだ。」

「もう私はどんなアメリカ人にとってもよそ者ではない。黒人の生活にこれほど深くかかわったのはアメリカの白人だけであり、白人の生活にこれほど深くかかわったのはアメリカの黒人だけである。」

「アメリカの白人のアイデンティティーは変貌してきた。もう世界の他の白人と同じではない。倫理的な問題を白か黒で塗り分ける世界観にしても、それが危険なくらいに誤っており、全然使い物にならないということが、ようやく分かりかけてきた。」

「アメリカの人種間ドラマは、新しい黒人を創造したばかりでなく、新しい白人までも創造したことを認識する時が来た。もうこの世界は白くはならないだろう。そして二度と再び白くはならないだろう。」

そして、彼はアメリカのハーレムに戻り、公民権運動の先頭に立った。

1930年代の労働者・農民の大闘争は、白人労働者の底力を見せたとともに、葛藤しながらも、「新たな白人」を発見し「人種資本主義」の変質を迫る「新たな黒人」を生みだした。

アメリカの「人種資本主義」の変質と「革命」の可能性

1960年代の黒人公民権運動は、人種差別法制を撤廃するとともに、女性の権利擁護運動、ベトナム反戦運動、学生運動の推進力となった。

それは、アメリカで、今もヒラリー・クリントン（民主党）に続く「アイデンティティー政治」（人種・ジェンダー・民族・性的指向・障害などの特定のアイデンティティーに基づく集団の利益を代弁して行う政治活動）なるものをもたらした。

公民権運動を契機に民主党は、「ルーズベルトのニューディール以来、民主党は労働者を守ってくれた」と熱心な支持者であった南部の白人と袂を分かった。

そして、第二次大戦後、アメリカ資本主義が世界を制覇するなかで「中流」となっていた白人労働者の「憂鬱」が始まる。

1980年、歴史家で公民権運動、反戦運動のリーダーのひとりであった白人ハワード・ジンは、「アメリカの歴史の全面的修正」を迫り、各界に大きな衝撃を与えた彼の著書、400年を超える「民衆のアメリカ史」の最後で書いた。

「1970年代中ごろから、金持ちでも貧乏人でもない白人労働者が、経済の不安定に怒りをいだき、自分の仕事に不満を感じ、自分の隣近所を気づかい、政府に敵対的に（投票にも行かなく）なってきた。」

「白人優位の感覚」が崩れた。

“1970年代中ごろ”は、石油ショックを経て、資本主義の歴史上一貫して増加してきた粗鋼生産をはじめ「モノ」の生産が行き詰まり、先進資本主義国の成長が頭打ちとなった「1975年恐慌」の時期である。

資本は、まず、多くの白人労働者を雇用する製造業の拠点を賃金の安い海外に移し始め、国内では機械に彼らの労働を置き換え始めた。

さらに彼は言った。

「彼ら白人労働者は、階級的要素と人種差別的要素を共有しており、右にせよ左にせよ、どちらの側の解決策も受け入れる余地がある。1920年代の中産階級にも同じような疎外感情があり、事実、KKKは何百万もの会員を擁したが、（1930年代大闘争につながる）組織的な左翼活動によってこの感情の多くは労働組合や農民組合、社会主義運動に動員された。今後の10年間にあっても、中産階級の不満を動員する競争が続けられるだろう。」

これは大きな画期だと、彼は言った。

「（“アイデンティティ政治”を含めて）アメリカの体制は、世界史上最も巧妙な支配体制である。しかし、1970年代末には、アメリカの体制は統制がきかなくなっている。われわれは、この国の歴史上はじめて、国民が根本的変革を求めて団結する見通しを予想できるようになった。」

そして、その「根本的変革」をした社会を「近隣（neighborly）社会主義」の「革命」として述べた。

「巨大企業や軍部やその政治的協力者からなる国家へと導いた人々から社会の権力の操縦桿を奪い取り、人間の自然な欲求から発する協同性の誘因により、職場や近隣社会に属する民衆の小集団、つまり、相互の連絡網を持つ協同組合のネットワークが、社会の決定を下す<近隣社会主義>は、資本主義の階

級的秩序や”社会主義“を名乗ってきた粗暴な独裁制をともに避けようだろう。」

しかし、その危険に気付いた資本は、「1975年恐慌の痛手」を「石油ショックに伴う低成長」という言葉で隠しながら、行き詰った「モノ」の生産から、「実体のない」金融と情報(IT)に活路を求め、「上からの階級闘争」すなわち、資本の自由が一番大事、方策は民営化だけという「新自由主義」を強力に推進する。

はじめは、「国家破産」に陥り IMF の介入を招いたイギリス。資本の代理人は「中流の勤勉な雑貨屋の娘」サッチャー。

「もはや、社会もない。労働者階級など階級なんかない。自分を助けるのは自分だ。頑張れば中流になれる」と最も戦闘的な炭鉱労組つぶしにまい進する。

そして、アメリカでは、まず、空港管理官などの闘う労働組合を叩き潰すのに躍起になった「三流西部劇役者」レーガン。既成大労組 AFL、そして AFL と提携して、すっかり体制化した CIO も一緒になって協力した。

日本では、海軍主計中尉として広島原爆を江田島から見て「原子力が大事だ」としか思わなかった中曽根がまねて、国鉄分割民営化により最大の国鉄労組をつぶした。

1980年代末に至り、「新自由主義」の見せかけの繁栄のなかで、ソ連が崩壊し、「“自由と民主主義”の資本主義の勝利」が声高に言われる。

ちなみに、1989年のソ連の国民総生産 (GNP) は、アメリカ 5兆ドル、EC(EU)5兆ドルに対して、1.5兆ドルとアメリカの 1/3、EC の 1/7。

この経済規模のソ連が、ここまで軍事力で欧米に対抗できてきたのは、「欧米諸国が実質的にいかに膨大な経済力の浪費をおこなっているか物語」ってもいた。

しかし、こうした結果、アメリカでは、“アイデンティティ政治”に関わらず、引き続き、貧困層の黒人が民営化した刑務所の稼働率を上げるために収監され続けるとともに、「モノ」作りの中心だった「中流」白人労働者の状況は、一層、不安定化していった。

レーガン (共和党) を引き継いだ父ブッシュ (共和党) は、「新自由主義」に基づく「アメリカ主導の世界秩序再編」を宣言し、夫クリントン (民主党) も、一層、「新自由主義」を推進する。

21世紀に入り、9.11に象徴される「新自由主義の過剰に対する反撃」を契

機に、子ブッシュ（共和党）は、「悪か正義か」と言って「戦争と侵略と格差拡大の8年間」を開始する。

盛んになっていた「新自由主義」に対する反グローバリゼーション運動、「多くの運動が集合した運動」は、この「テロか愛国か」で分断されるが、反戦運動は続き、2008年、リーマンショックで「新自由主義の破綻」が示されると、「ブッシュの8年間への明確な非難」が、圧倒的多数で、オバマ（民主党）をアメリカ史上初のアフリカ系アメリカ人大統領に押し上げた。

しかし、オバマは、リーマンショックで失われた製造業200万の雇用と閉鎖に追い込まれた数百の工場を立て直さずに、「1%より99%。銀行にNo」と**Occupy Wall Street**の人々が叫んだものの、元凶の金融業に「いつもの仕事に戻れるように」資金をつぎ込んだだけだった。

また、「2000万人に医療保険を提供する」という「オバマケア」は、製薬業界との野合により、「黒人などの貧困層を助けるために中流に負担を強いる制度が一つ増えただけ」で、「国に支援を受けず、勤勉に働く」中流層の反対運動「Tea Party」運動を引き起こした。

そこに、2016年、「オバマはアメリカ人ではない」と言うトランプ（共和党）が登場した。

「現代は不気味なほど1930年代に似た状況」と2017年の著書「Noでは足りない—トランプ・ショックに対処する方法」に書いたジャーナリストで著名な反グローバリゼーション運動の活動家である白人女性ナオミ・クラインは言う。

「オバマ就任後、大半の進歩団体は安心し、（何もしない）オバマへの圧力が不在だった。」

そして、トランプが白人労働者の支持を受けた理由は、「（“アイデンティティ政治”という）人種やジェンダーに対する憤りや、白人男性の地位の変化と関連しているが、それは全体のごく一部の説明にしかない。この社会的地位の喪失という問題の下には、基本的に経済的安定の喪失が存在しており、それこそがトランプの勝利を導いた。」

「トランプの支持基盤は、年収3万ドル未満の貧困層ではなく、年収5万～20万ドルの中間所得層である。しかし、CNNの調査によれば、経済状態が4年前より“悪化している”と答えた人の77%がトランプに投票した。」

ハワード・ジンが言っていた「中流」白人労働者である。

その「中流」白人労働者は、イギリスでサッチャー以来、「安っぽい、犯罪者、荒廃したモラル、低学歴、失業」などと結びついた差別語、「CHAVS（チ

ャブ)」と呼ばれたように、今、アメリカでは、富裕層、そして、白人、黒人を問わず「リベラル派」から、ヒルビリー（田舎者）、レッドネック（首筋が日焼けした白人労働者）、ホワイト・トラッシュ（白いゴミ）、などと蔑称で呼ばれている。

しかし、トランプ登場とともに大評判になった「ヒルビリー・エレジー〜アメリカの繁栄から取り残された白人たち」の著者 J.D. ヴァンスは言う。彼は「自分自身を“スコッツ＝アイリッシュのヒルビリー”だと心の底から思っている」という 1984 年にオハイオ州の鉄鋼業の町で生まれた青年である。

「白人労働者階層の将来がどこよりも見えにくい、仕事も希望も失われた鉄鋼業の町で、私と家族、隣人たちはつねに不安に追い立てられている。社会制度そのものに対する根強い不信感がある。」

「じつは、ここの住民がオバマを受け入れない理由は、肌の色とはまったく関係がない。高校時代の同級生には、アイビー・リーグ（北東部の名門私立）の大学に進学した者はひとりもない。オバマはアイビー・リーグの法学の先生のようなのだ。」

彼は「多くは、有名大学に行くよりも、勤勉に働き同じ町で、安定して住み続けることを望む」とも言う。

ナオミ・クラインは、白人労働者が意識する「白人男性の社会的地位の喪失感」も一概に非難できないと言う。

「誰でも、尊厳ある人生を送る権利がある。」

「新自由主義の継ぎはぎフランケンシュタイン」の富裕な資本家トランプがいくら「人種資本主義」を操作しようとしても、底が割れているとも言える。

今や、民族（人種）の尊厳より、労働の尊厳である。

そして、ナオミ・クラインも、ハワード・ジンの「ホワイトハウスに誰がいるかではなく、誰が抗議しようとしているかということだ」という言葉を引用して、1930 年代の大闘争を思い出せと言う。

「ニューディール政策も、下からの集団的な抗議、包括的な社会制度を要求する大衆運動がなければありえなかった。」

アメリカでは、「人種資本主義」が変質するなかで、教員・マクドナルド・港湾・トラック・公務員労働者、黒人や移民、女性、先住民、等の引き続く旺盛な闘いも踏まえて、新たな「革命」の可能性が見えてきたのかもしれない。

それは、ハワード・ジンの言った＜近隣社会主義＞のような「革命」。

あるいは、ナオミ・クラインが、トランプ登場後に、労働運動、気候変動阻止運動、女性の権利擁護運動、黒人や移民解放運動、先住民運動が集まり討論

すると、分断されがちなそれぞれの運動の“共通の糸”は、＜ケア社会主義＞という「革命」。

「人間と地球を際限なく Take（取る、搾取・収奪）するシステムから、土地や地球の生命やお互いを Care（配慮、保護）する社会へ」

そういう、民衆が根本的変革を求める「新たな社会主義革命」。

一方、今の状況は、ハワード・ジンの指摘した 1920 年代と同様、まさに、「中産階級の不満の動員の競争」、民族（人種）の尊厳か労働の尊厳かのせめぎあいでもある。

その際、あらためて、思い起こすべきなのが、1930 年代大闘争で、人種を問わず、労働者・民衆が示した原点である。

「自分たちの問題は自分たちでのみ解決できる。自分たちのために闘うのは自分たちしかいない」

日本では、この後見るように、欧米“白人種”資本主義の「最後のまねっこごころ」として、1930 年代、朝鮮に続いて「満州侵略」を開始する。

奇しくも、差別と侵略を正当化し、日本国内の「閉塞感（≒憂鬱）」を吸収するために唱えられた「大儀」は「欧米からのアジアの解放」だった。

そして、現代日本では、「アメリカのこぼんざめ」として、前に見たように、1990 年代から「移民国家」となり、「人種資本主義」をあらためて展開しようとしている。

しかし、同時に、第三章後半で見るように、日本の民衆の歴史も、アメリカの 1930 年代大闘争と同様に、しかも、アメリカより数年早い、創造的な労働者・民衆の闘いの歴史を持っている。

*ハワード・ジン「民衆のアメリカ史（上・中・下）」、ナオミ・クライン「No では足りない—トランプ・ショックに対処する方法」、現代革命ライブラリー第一巻「ヨーロッパ・アメリカ労働者の反乱—1930 年代の階級闘争」、長沼秀世「アメリカの社会運動—CIO 史の研究」、ジョン・C・ウィリアムズ「アメリカを動かす“ホワイト・ワーキング・クラス”という人々」、J・D・ヴァンス「ヒルビリー・エレジー—アメリカの繁栄から取り残された白人たち」、ラングストン・ヒューズ自伝「1.僕は多くの河を知っている、2.きみは自由になりたくないか？ 3.終わりのない世界」、リチャード・ライト自伝「アメリカの飢え」、リチャード・ライト「アンクル・トムの子供たち」、ジェームズ・ボールドウイン「アメリカの息子たちのノート」、広松渉「今こそマルクスを読み直す」、ブレイディみかこ「労働者階級の反乱」